《京都》御所と離宮の栞　～其の二十七～

御学問所

本号では、御読書始や和歌の会などの文学や芸能に関わる儀式などに使用された御学問所についてご紹介します。令和3年4月7日（水）～11日（日）に京都御所で行う「宮廷文化の紹介」では、本号で紹介する御学問所の襖絵や儲君親王御読書始の人形・調度品を用いた再現展示を行っています。

御学問所の概要

現在の御学問所は、紫宸殿や清涼殿と同じく、安政2年(1855)に建てられ、小御所の北側、御常御殿の西南に位置します。御殿内はすべて畳敷きで、6室の部屋があり、西側は廊下が接し、それ以外の三方には御縁座敷(ごえんざしき)が設けられています(2頁参照)。

この御殿は、床や違棚(ちがいだな)、明かり障子、遣戸(やりど)、畳が用いられるなど書院造建築の特徴が多く見られます。

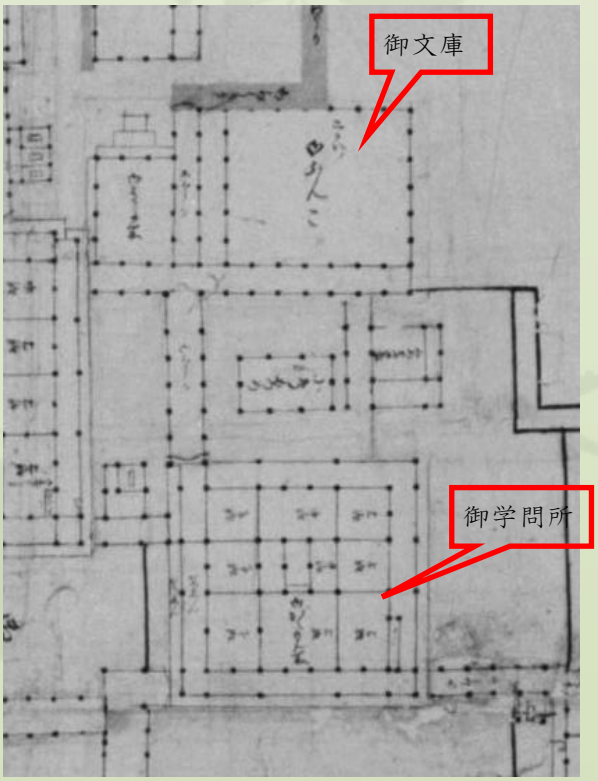
もともと、御学問所は南北朝時代の内裏(だいり)から名称がみられ、江戸時代の慶長度内裏(1613)から独立した建物となりました。慶長度内裏の御学問所では、御手習、和歌の会、御読書(おとくしょ)などが定期的に行われ、後水尾天皇自身や近臣の教養を高める場として用いられました。北側には同じくらい大きな御文庫が設置され、廊下で直接繋がり、西側の御常御殿からも簡単に行き来できるようになっています。

その後、火災などによって7度建て替えられましたが、その規模や形状は時代毎に変化し、二つ前の宝永度内裏から現在の御学問所に近いものとなりました。

安政度造営の現在の御学問所も、御読書始(3頁参照)や和歌の会などの文学や芸能に関わる儀式などに使用されたほか、対面の場や御常御殿の修理などによる臨時の居所としても使用され、孝明天皇が徳川家茂や徳川慶喜と対面する際にも用いられました。

また、新政府の樹立を宣言した「王政復古の大号令」は、慶応3年12月9日天皇出御のうえ御学問所で発せられました。

御学問所　外観

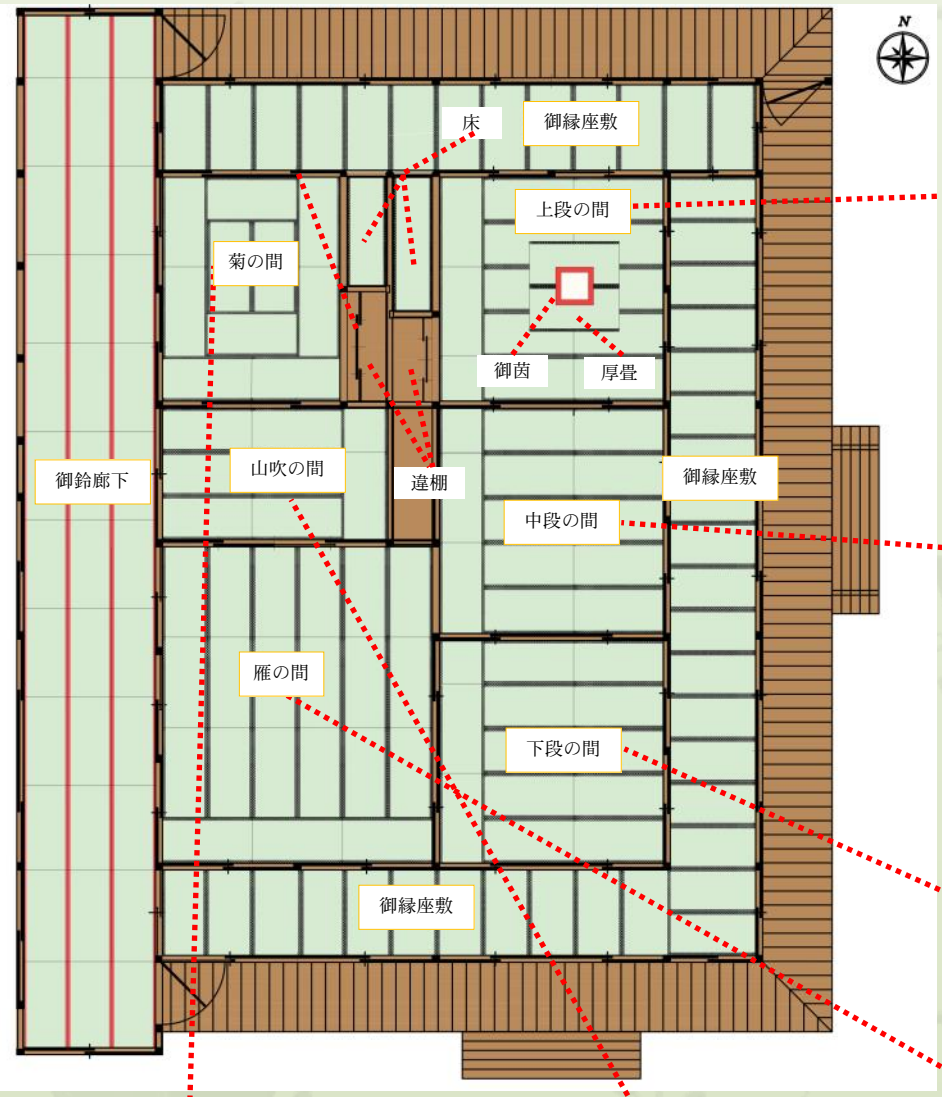


慶長度内裏指図(部分)　宮内庁書陵部所蔵

御学問所の内部

御殿の東側には上段の間、中段の間、下段の間が並びます。上段の間には厚畳と御茵が敷かれ、天皇の御座が設けられています。襖や壁張付には「十八学士登瀛州図」（栞其の十七）と題し、唐の皇帝太宗が位につく前に開いた文学館に集められた18名の文士達の様子が画かれています。また、違棚上部の天袋には藤原定家の和歌を画いた小襖が填められています。中段の間の襖絵には、書聖とも呼ばれた王羲之が蘭亭に文人を招き、曲水の宴を開いた様子が画かれ、下段の間には、名勝地として多くの文人が訪れた中国湖南省にある岳陽楼と、その背後にある洞庭湖が画かれます（4頁）。いずれも学問や文芸に関する画題が用いられており、御殿の用途に応じた画題の選定が行われたことが見受けられます。

西側には、菊の間、山吹の間、雁の間が並び、それぞれ、「菊図」、「山吹図」、「芦に雁図」が画かれています。菊の間の違棚の上部の天袋には、「錦花鳥図」が画かれています。



和歌の意図　土佐光清　筆
十八学士登瀛州図　狩野永岳　筆

上段の間

蘭亭図　岸岱　筆

中段の間

岳陽楼図　原 在照　筆

下段の間

錦花鳥図　土佐光文　筆
菊図　岡本亮彦　筆

菊の間

山吹図　円山応立　筆

山吹の間

芦に雁図　岸 連山　筆

雁の間

儲君親王御読書始

平安時代以降、天皇や親王の幼年期には、漢籍の読みを初めて学ばれる修学始の儀式として、御読書始がありました。7歳に行われることが最も多く、その後は師範の計画に沿って学習を行います。また、御読書始は宮中のみならず、宮家や貴族の家でも行われることがありました。

現在の京都御所では、文久2年(1862)5月27日、御学問所において睦仁親王(後の明治天皇)の儲君親王御読書始が行われました。儲君とは、天皇になるべく定められた皇子の立太子前の地位で、御学問所中段の間において、侍読と呼ばれる師範から漢籍の訓読を学ばれました。

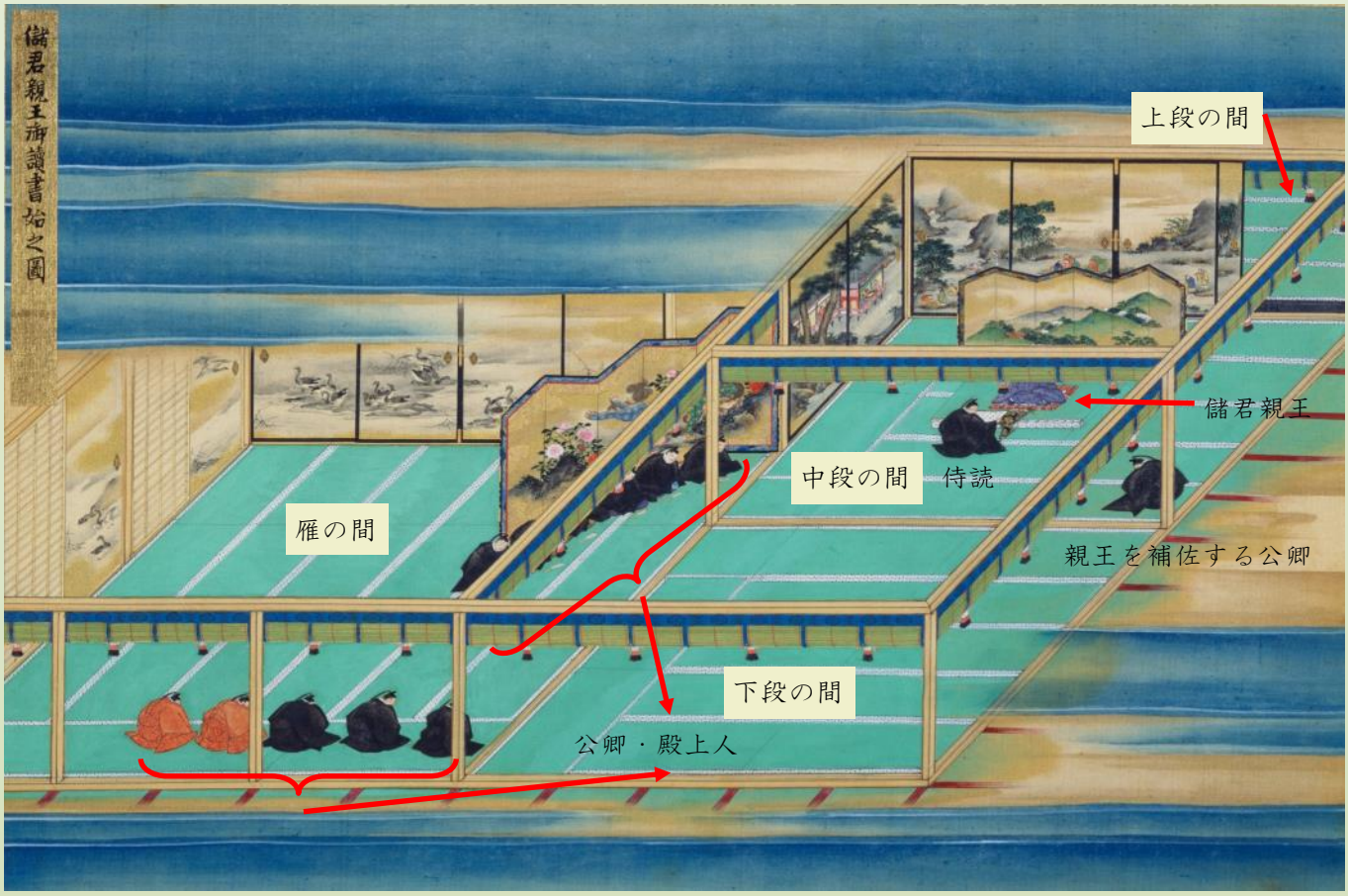
この儀式では、御学問所の中段の間、下段の間、雁の間の襖を取り外し、御簾を掛けて儀式の空間を作り上げています。江戸後期の儀式などを記録編纂した『公事録』(写真:下)にもこの空間がしっかりと画かれています。

儀式は、雁の間に衣冠姿の公卿や殿上人などが列座した後、童髪に直衣姿の親王が、上段の間から中段の間に入り着座されます。続いて、教科書でもある『古文孝経』の巻物や字指(竹製の細い棒)を載せた文机が御前に運ばれ、侍読が召されます。孝経とは、中国の経書(儒教の教えを記した書物)の一つで、孝のあり方を説き、日本でも古来広く読まれ、御読書始において多く用いられています。字指は元々、角筆という紙面を押しくぼませて字を書く筆記具ですが、御読書始の際には、文字を指し示す道具として使われました。

御前に着座した侍読は、『古文孝経』を開き、親王に字指を渡し、自身も字指を手に取って、冒頭の一節を3度読み上げました。

この儀式に父君である孝明天皇の正式な出御はありませんでしたが、孝明天皇はこの儀式を密かにご覧になり、親王のご成長を喜ばれたと伝えられています。

ここでご紹介した儀式「儲君親王御読書始」について、装束人形や調度品などを用いて再現した模様を、「京都御所宮廷文化の紹介」〈令和3年春〉にて展示します。



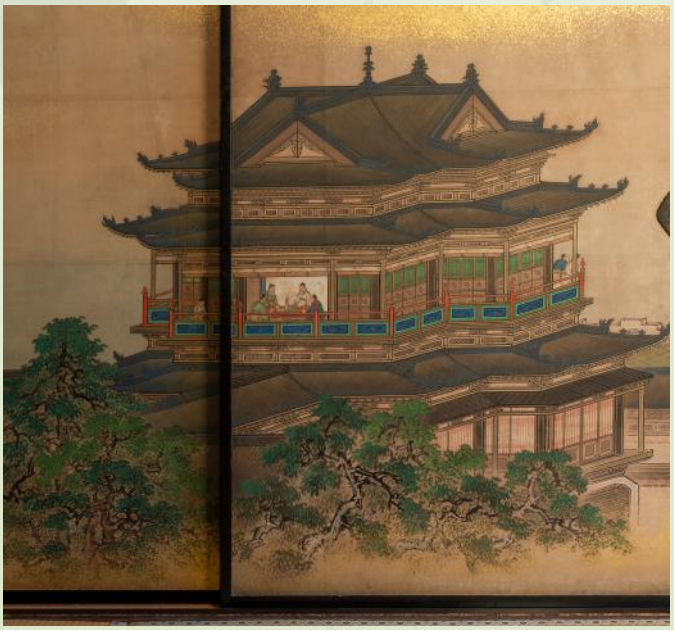
「儲君親王御読書始之図」(『公事録』) 宮内庁三の丸尚蔵館

下段の間　岳陽楼図

西面（左）と北面（右）

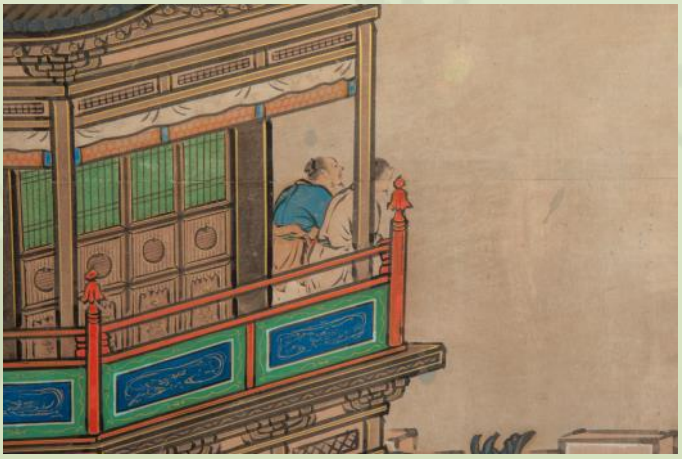
京都御所御学問所下段の間の四方16面の襖絵には、「岳陽楼」と題し、湖畔に佇む岳陽楼と海のように大きな洞庭湖の情景が鮮やかに画かれています。画題となったこの場所は中国の湖南省にあり、古来、風光明媚な地として認識され、漢詩などの題材に使用されることも多く、唐代の杜甫（とほ）の「岳陽楼に登る」や宋代の范仲淹（はんちゅうえん）の「岳陽楼の記」などが有名です。

下段の間の西側から北側の襖絵には城壁で囲まれた岳陽楼が大きく画かれ、建物内部には飲食を楽しむ人物や、欄干越しに洞庭湖を眺める人物が見られます。



岳陽楼

飲食を楽しむ人物



欄干越しに洞庭湖を望む人物

東面（左）と南面（右）

東側から南側の襖絵には、数隻の帆掛け船や投網で漁をしている船が浮かび、陸地では漁で使う網が干されている様子が画かれ、和やかな空間が表現されています。

また、四方全ての面に画かれた洞庭湖は、岳陽楼や大きな山を近景とし、湖面には島々が画かれて、奥行きのある実に広々とした風景が表されています。

この襖絵の筆者は原在照（はらざいしょう）で、聴雪上（ちょうせつ）の間の「芭蕉犬（ばしょうにいぬ）」と「葡萄栗鼠（ぶどうにりす）」（以上、栞其の十九）や、桜の間「桜」（栞其の二十三）の襖絵、御常御殿東御縁座敷「陵王納曽利（りょうおうなそり）」（栞其の十九）の杉戸絵などを画いています。

漁の様子と陸地で干される網

ここでご紹介した襖絵「岳陽楼」から4面を「京都御所　宮廷文化の紹介」〈令和3年春〉にて展示します。

湖に浮かぶ船

「京都御所　宮廷文化の紹介」〈令和３年春〉　案内図

「京都御所　宮廷文化の紹介」〈令和３年春〉の期間中は、今回ご紹介した儲君親王御読書始（再現展示）や岳陽楼の襖絵以外にも、紫宸殿内の高御座・御帳台や牛車など様々な展示がご覧いただけます。

これまでの「《京都》御所と離宮の栞」については、宮内庁ホームページのこちらからご覧ください。

＜問い合わせ先＞
〒602-8611　京都市上京区京都御苑３　宮内庁京都事務所
代表電話：075-211-1211　参観係直通電話：075-211-1215
其の二十七：令和3年3月31日